

あらためて青年教育のありかたを考える

ー青年期教育における文化活動の役割を中心にー



三多摩青年教育セミナー
東京都立川社会教育会館

3. 「視点」にそっての横断的分析

「視点」を設定するまでのいきさつ、「視点」の性格などについては、すでに「セミナーかくはじまり……」でふれているとおりであるが、「視点」は、このセミナーでの実践を分析するための「視点」であり、理論的に十分討論された成果であるとはいえない。その意味では、今後とも、「視点」づくりのための討論を継続しておこなわねばならない。

分析対象としてのレポートは以下の8本である。

○ 「私のやってきたこと」	羽村町公民館	小柳津隆行
○ 「ミュージカル教室について」	国分寺市恋ヶ窪公民館	林 和夫
○ 「福生の青年サークル」	福生市公民館	松坂 直人
○ 「サークルリーダーレクリエーションのあゆみ」	都府中青年の家	西村美東士
○ 「フォークギター教室の実践」	昭島市教育委員会	佐直 昭芳
○ 「秋川の青年教室」	秋川市中央公民館	高山 次雄
○ 「青年事業のながれと落語愛好会」	小金井市青少年センター	福田 且則
○ 「陶芸、版画教室」	小金井市公民館	河内 邦雄

なお、各レポートの詳細は、後日、手帳り別冊「実践記録集」がつくられる予定であり、それを参照していただきたい。

(1) 目標と目的

① とりくむにいったきっかけと、職員がどういうつもりで開いたかについて

秋川市のギター教室・小金井市の落語教室・国分寺市の恋ヶ窪公民館でおこなわれたミュージカル教室・府中青年の家でおこなわれたダンスフェスティバル・昭島市のフォークギター教室などを通して言えることは、職員がその地域の現状や過去の事業との関係、また施設の特色を考えながら講座を決めた場合と青年から直接こんなことをやって欲しいという具体的な提案に基づいて始めた講座の二通りがある。前者の例では疊の部屋が多いという条件や継続的な文化活動の展開をめざした青年事業の開催をということで始められた小金井市の落語教室や、青年講座を再び青年の手に返してゆき青年自らの学習・文化活動の場としての青年教室を再認識してもらうためという昭島市のフォークギター教室などが良い例である。後者の例では国分寺市の恋ヶ窪公民館のミュージカル教室がある。この場合は秋から青年教室を始めようと職員が企画を考えていた時に、歌ごえサークルとして恋ヶ窪公民館を使っていたある青年からミュージカルをやりたいと提案され不安に思いつつもやり始めたところ今までのミュージカルという一般的な観念を打ち破り、まったくの素人でもこんなことができるのだということを知り得たという実践例もある。

②なにをねらって講座を開いたか

小金井市の落語教室は自己表現の手段としての文化活動・地域へ積極的に働きかけるもので幅広い年齢層に受け入れられなおかつ、青年がリーダーシップをとれるものといったことを考慮に入れながら落語を実際に演じる中で話芸を通して自己を表現する楽しさや落語の中に現われている人間讃歌の情感に触れることで生きるよろこびを日常生活のなかに見出すことをねらいにおこなわれた。昭島市のフォークギター教室などは過去において職員主導の青年講座であったことやサークル活動を活発にしてゆくことと青年講座との関連があまりにもなさすぎたということを反省しながら7～8年前から活動している。うたごえサークル「はだし」と打合せるなかで音楽関係の講座を開こうということになり、誰でも気軽に参加できること・うたごえの伴奏として結びつけられるという二点からフォークギター教室を開設することになった。この講座によって青年に文化活動をどう広げるのか、サークル活動をいかにして活発化していったらよいかの打開策をさぐろうとしていた。しかし同市で以前同じようにおこなわれたフォーク教室がおこなわれた時とはフォークソング自体があまりにも変わってしまった。集団から個あるいはごく少数でうたうフォークソングへとフォークソング自体が変化した現在ではどんな歌を選ぶかがとても難しかったということである。国分寺市の恋ヶ窪公民館でおこなわれたミュージカル教室の場合は最近の傾向として演劇・人形劇などの創作・表現活動がしばしばおこなわれていること、恋ヶ窪公民館として今まで創作活動を中心とした青年教室を実施したことがなかったことなどを考慮に入れておこなわれた。ミュージカル教室の発案者である一青年の言葉を借りるならば「東高西低」の国分寺文化地図をなんとかしてはいけないということになる。東高西低とはいったいどういうことかという、国分寺市の東端に位置する現在の本多公民館（旧国分寺公民館）だけしかなかった時期が長く、ずっと遅れてきたのが市のほぼ中央に位置する恋ヶ窪公民館であるといった条件で「東——本多公民館」にないものを始めようと考えたという。府中青年の家でおこなわれたダンスフェスティバルは、青年の家でまだつかみきれない青年達に青年の家を知ってもらうことによって、青年の家の利用者層を広げたいということと、あまり外と交流をもちたがらないレクリエーションサークルをもっと外に目を向けさせたいということで始められた。公民館・青年の家でフォークダンスや社交ダンスはしばしばおこなわれる。しかし一般に退廃と言われていたディスコを一つのレクダンスとしてとらえようとした試みは敏感に世の中の推移に反映する青年達のための講座として大きな意味をもつものだと考える。ディスコは店によってもかなり雰囲気は異なるが（もちろん同じ曲であっても踊り方が違う）概してマスコミに取り上げられるよりは健全なものであると思われる。蛇足ながら国分寺市のようにディスコを活動の中心にすえた地域の青年達がサークルをつくり、自分達の手でディスコパーティーを公民館を会場にし企画を進めているようなところもある。

③どういう人達が来ることを願って、またその人達がどうなることを願って

小金井市の落語教室は中学生以上ということで幅広い層に呼びかけながらも、青年がリーダーシップをとれるような配慮をしたということである。応募者は20名で、10代から50代までの人が集まったなかで20代が半数以上をしめたということである。そして、みんなで「ロベタ」でも小咄

の一つも人前で行えるようになろうということを合言葉に進めてゆくなかで始めて1ヶ月くらいの中に3分の1も来なくなってしまったり鑑賞派と実演派に分かれたりしたが、プロを呼んで来て小金井で寄席を開いたりプロにまじって自分達も寄席に出演したりヤングフェスティバルへの参加をしたりするまでになる。これに加えて老人ホームへ出掛けてゆき、自分達が身につけたもので楽しんでもらうという働きかけができるようになってきている。この青年教室を進めてゆく中で相手の目を見て話もできず、ことばも不明確な16才のある青年は実力がともなわないにもかかわらずプロになりたいと言い出し林家木久蔵に会いにゆき追い返されるほどの積極性を示すまでになった。この例のようにプロをめざして実力もないままに走りだしてしまった例は少ないにしても、プロへの道を選び自分の道を切りひらいていった人も、秋川市のギター教室の報告などでもあったという。ここまで青年の生活を変えてしまわなくても家と職場の往復から家と職場と公民館の関係を持つようになった各青年は今までにない横のつながりをもてたようである。この青年教室をきっかけとして自分を見直し〇〇から保母へと職場を変えた人、教室の中で結婚相手を見つけたという人まで大なり小なりの変化が見られる。他の市や報告を見ても「どんな人達が来ることを願って」ということでは共通点が見いだされる。寝るためにしか帰ってこないか、それに近い青年達と地域の関係の中で公民館を基点としてその地域で青年達の中に横のつながりを作ってゆきたいということが第一点である。このことに関しては単に青年にのみ必要なことでなく、成人一般に必要とされる。公民館職員の存在もここに関ってくるのである。第二点として公民館や青年の家のもっているイメージをもっとふくらみあるものになりたいということである。この点に関しても単なる青年講座にのみならず成人講座にも言えることである。

最後に社会教育の場合、学校教育と異なり公民館職員の嗜好あるいは直接には一人の青年の希望であっても講座としておこなえるという自由がある一方、基盤が弱いとも言えるのではなからうか。

(S.M)

(2) 事業の内容について

ここでは、各担当者が事業設定の段階で、その文化活動の内容・特徴をどのように捉えていたのかを概略し(1.の視点と重複する面もあるが)、それらの共通点を探り、事業実施の中で、参加者の意識の変化、その契機を明らかにしていきたい。

〔秋川市 ― ギター〕

ギターの基礎練習を主な内容とし、講座終了時にアンサンブルができるようになることを第1の目的とする。また、翌年に予定している「うたごえ教室」の伴奏者になってくれたらという願いもある。

〔昭島 ― フォークソング〕

ギターは伴奏のためのものであり、表現は肉声で行うものである。最近では、1人でつまびく「四畳半フォーク」と呼ばれるものが流行しているが、70年代初頭のシングアウトするもの、つまりみんなで歌って共感するもの、グループでないと成立しないものを旨とする。

〔国分寺——ミュージカル〕

ブロードウェイミュージカルでなく、自分たちの身の回りのもの（生活）をテーマとして、演者と観客と感動を共有できるもの、いわば統一劇場風ミュージカルとする。

〔羽村——演劇・人形劇〕

羽村の場合、文化活動の特徴は、事業設定の動機に強くあらわれている。担当者は、文化活動を生活の表現として捉える。自分のことは・自分の身体で自分の考えたことを発表していくことであると。また、七宝・陶芸などの個人的作業に対峙させるものとして、仲間が力を合わせないとつくりえない演劇・人形劇を設定する。

〔小金井——落語〕

落語は伝統的な大衆芸能である。古典の中の人間関係の描写や庶民の情感は、現代の疎外されている青年にとっても、その感性に訴えるものは大きい。落語を実演することでの仲間づくりであり、落語を論じようという性格のものではない。

〔府中青年の家——ディスコ〕

ディスコダンスを踊ることは楽しいことである。一般的に言われているような不健全なものではない。そこには、強制的ではない連帯感がある。

① 事業内容の共通点

a 集団活動

ギターアンサンブル、グループフォーク、ミュージカルそして演劇、すべて集団での活動を基礎としている。とくに、フォークではみんなて歌って共感するものとして、演劇では仲間が力を合わせないと作れないものとして、それぞれの事業を企画している。落語は1人で演じるものであるが演じる場としての寄席は1人では成立しない。ディスコも連帯感の存在即ち仲間を前提としている。

個々の事業・文化活動の特徴の共通点が集団活動であるというよりも、担当者が「青年」を対象とする事業を企画する場合、「青年—仲間づくり」という意識が潜在しており、結果としてグループ活動—共同作業を中心とする文化活動を企画しているようである。

b 発表・公演

上記すべての実践が、何らかの形で発表・公演を前提としている。およそ文化活動の場合、個人・集団を問わず自己表現抜きには考えられない。また発表するということにより、目的ができ、刺激され、発表すること自体により達成感が得られる。

6つの実践から次のような方向が見い出される（ややこじつけ的ではあるが）

文化活動を生活の表現として捉え、演じることによって青年の感性に訴え、演者と観客と感動を共有し、連帯感を生み出す。

文化活動の特徴として、aの集団活動は参加者に対する運営上の視点であり、bの発表・公演は参加者1人ひとりへの動機づけと観客—講座の外を向いたものであると言えないだろうか。

事業の共通点からはやや逸脱するが、参加者一人ひとりの成長を考える時、その文化活動固有の特徴をおさえることが必要となってくる。歌・劇・踊り等のもつ特徴が、彼の感性にどのように働

らきかけていくのだろうか。事業設定時に担当者の願いとして捉えているようだがやや曖昧であると思う。

② 参加者の意識

参加者の意識は、講座申込時点では、ミュージカル・落語を除き、その文化活動に対する印象、イメージするものが担当者と著しく異なるものはないようである。ただ、フォークソングの例のように四畳半フォーク志向・技術志向・仲間志向など、参加者一人ひとりの要求が種々ある場合は、自分の要求に合わなければやめていくということはある。

ミュージカルでは、やはりブロードウェイミュージカルをイメージし、果たして自分にできるのか不安ながら参加したという人がほとんどであり、落語でも、落語は聞くものという通念から参加した人が多く、自ら演じるための教室と聞かされた時は、驚きであったという。

意識の修正

a 講師の役割

講師により意識が修正されていく単的な例はミュージカル教室である。講師に統一劇場の人を招き、彼によって統一劇場風ミュージカルが、参加者に理解されていく。映画「同胞」の話も重要であったと思われる。講師・教材が参加者の意識に対する影響は、非常に大きなものがある。不安をもって参加したメンバーがミュージカルをやりきり、また、フォークでは、フォーク運動で歌われた歌を練習曲とすることを通して、参加者のレパートリーの中に組みこまれていくということがみられる。

担当者の願いを実現するためにも、その願いを明確にとらえ、それに合った講師・教材の準備が重要であることが指摘されよう。

b 「つくる」ことと「共同作業」

第2には「つくる」ということであろう。ミュージカル・演劇・落語・ディスコ・ギターすべて「つくる」→演じる、演奏することであり、その作業を通して意識が修正されていく。その際、公演ということが、「つくる」ことの目標となり刺激となるのも見のがせない。

ミュージカルや人形劇を見ると、この二つはまったくの創作物である。そのストーリーまで自分たちで創作していく過程がある。自分たちが主体的に取組まないと作品ができない。教室・講座が進行しない。自分たちの手で作ることによって教室が運営されていくことを実感する。講座の参加者が運営者に転化する。客体から主体に意識が変化するのである。

ギターでは、アンサンブルの練習を始めてから、メンバーの全員参加が必要になってくる。パートの誰一人欠けてもアンサンブルができない。自分が欠けては練習ができないという意識が、メンバーに浸透しはじめる。その意識の現われとして、教室終了後にグループで喫茶店に集まるようになったものと思われる。

アンサンブルという共同作業を通して、一人ひとりの大切さがメンバーの中で確認され、仲間意識が芽生えてくるのであろう。これは他の文化活動、ミュージカル、フォーク、演劇にも言えることである。これらは、演じること（作ること）＝共同作業である。

では、落語の場合はどうであろう。落語を演じるのは1人で行う作業であり、明らかに共同作業ではない。しかし、落語を演じるには、演じる場・寄席が必要である。寄席は演者1人ではつくりえない。多くの人の協力を必要とする。会場の準備・宣伝・受付、その他諸々。もちろん他の演者の参加も必要である。寄席を「つくる」ことを通して、落語も1人ではできないことを学んでいくのではないだろうか。（以下ディスコについては仮定）

同様に、ディスコを「つくる」ということは、踊ることと踊る場をつくることに分けられるであろう。踊る場をつくる人たちの中では、寄席をつくると同じような共同作業が展開される。そこには仲間意識が芽生えてくる基盤がある。さて、ここから他の文化活動と異なる点である。演劇、フォーク、落語など他の文化活動の公演の時、演者と観客とは舞台と客席にはっきり区別されている。演者と観客と共感することはありえても、観客としてはあくまでも受け手として共感しているのである。しかしディスコでは、踊る場をつくった人も踊り手であり、踊る場をつくった人の立場から見れば、観客も踊り手なのである。ここでは、演者も観客も同様な踊り手である。担当者のいう連帯感とはこのことをさすのではないだろうか。文化活動として見た場合、ディスコほど演者と観客とが一体化するものはないであろう。ただ、ここでは一人ひとりが大切にされるのかどうか疑問である。担当者の今後の取組みと分析に期待する。

③ 評価（担当者のつぶやき）

当初の目的を達成できたかという点、どうもそうではないようである。最後に担当者がその事業を振り返ってどう思ったのか。担当者のつぶやきとして列記する。

- その文化活動の意義、歴史的位置づけなどの把握が弱い。
- 参加者の一人ひとりが、何を表現したいのか、自分でわかっている。
- 共同作業により、信頼関係・緊張関係がつくりやすい。しかし、その具体的手だてがはっきり認識できない。
- 個々の参加者の成長のようすがわからない。

（M.K）

(3) 事業経過

それぞれの事業の報告をもとにして、その事業の流れにそって、特徴を探ってみたい。

① 事業がスタートするまで

鹿ヶ窪公民館のミュージカル教室では、同じ地域の本多公民館での演劇の教訓から仲間づくりに力点を置くことが進められる。教訓とは、教室の中で演劇を楽しむという人と、専門志向していった人たちの分裂があったという事実である。他の事業の再検討からの出発である。また、小金井市での落語では、担当職員自身が各大学の落語研究会をこまめに歩くことにより、落語の実態と講師の選定につとめ、準備会をもっている。府中青年の家のダンスフェスティバルでは、担当職員が地域の青年たちに触れたいということで、府中レクリエーション研究会に入会し、ダンスサークルの交流とそこか

らの連絡体、そして実行委員会に発展させる方向をもった。それぞれ手間のかかる出発ではあったが全体の基盤づくりに動いている。

② スタート直後

ミュージカル教室では、いわゆるブロードウェイ的なミュージカルというイメージを払拭し、自分たちでできるものということを徹底させていった。講師による内容の確認と、参加者へ自信を持たせるようにすることが講義のなかで進められている。小金井の落語の教室では、若手落語家や大学の落語研究会との座談会を通して、参加理由を探る作業が行なわれている。そして、その話し合いのなかからの参加意識を把握すると同時に、準備段階で練り上げた、自分たちでやる、地域に根ざすという二本柱の目標を理解して、共通の認識とるように心がけていった。参加者は様々な期待をもって参加している。落語の場合をとっても、やってみたい人、単に落語を聞きたい人とがあるし、やってみたいと思っている人の中には、すでにできる人とまったく初めての人もいるわけである。事業のねらいをおさえたうえで、それぞれの対応を行なっていくことが必要とされる。また、ここでも講師との雑談の中から参加者に自信を持たせるように努力されている。羽村での演劇では、台本選定の討論で、講師の希望と参加者との希望の間にズレが生じて、最初の山場となる。

この時点で、その事業の内容の確認をしっかりとっておかなければ、この後の進行へ響いていく。その確認のために、パーティーのような交流会や座談会を通して、参加者の意識をあらためて把握し、それと同時に統一させるための職員と講師の役割の重要性をしめしているとも言える。

③ 内容にはいつていく時期

回を重ねるなかで、参加者の動きもいろいろでてくる。そのなかには離れていってしまう人もでてくる。演劇、ミュージカルなどは、内容から一人が欠けてもできなくなるということや、事業での参加者が小人数だったということもあり、まともにはあったようである。しかし、単にそのような条件のみではないようである。教室に出席できなかった人に対して、その日の経過の報告を送ると同時に仲間同士で電話などにより連絡をとるように心がけたということである。また、宿題（作業）がたえてきていなくとも、出て来られる雰囲気づくりにも努力している。このことは集团的作業の必要性からできたものと言えるかもしれない。しかし、文化活動における個人的作業といえるもの（絵画、花、茶など）においても細かい配慮をすることは、必要である。ある反省がある。配慮のなきのために、続けてこれる条件の青年の多くが、そこから離れていった。電話の一本でも入れれば、10分間の話し合いをおしまなかったら……。全体の流れをおさえつつ、部分のうごきにも目をくばる難しさ、真剣ならばこそ悩みも多いわけである。参加者のまともは、職員のみでできることではなく、参加者相互の努力が大きい作用をするようである。ただ、そのような雰囲気にもっていくのは、担当者と講師の役割であり、そのためには、注意深い観察が必要のようである。

(4) 区切りを目指す時点

「区切り」つまり演奏会、公演など今までの成果を発表する時点である。「区切り」を目指す頃に

なると仲間意識の高まりがはっきりみられてくる。ここで取りあげた事例の中で「区切り」にいたる前でのうごき、合宿とグループ化がみられる。昭島のギター教室では、まずグループごとに調弦、練習を行なっているが、これは担当者が意図的に、つまり職場、住む場所などで分け、グループのコミュニケーションがよい状態になるようにしたものであった。しかし、合宿を通して青年たち自身から、3グループが、そして合宿に参加できなかった1グループの計4グループがコンサートでのグループとして形づくられていっている。コンサートが目標となつて、グループはますます結束し、コンサートの真近には週一回の教室での練習では足りず、グループごとに積極的に練習を行なっていた。全体としての付き合いよりも、喫茶店でのグループ内の付き合いで占められるようになっている。

発表を前にしての合宿というのは、ほとんどの事例の中でみられる。この時期には、仲間意識もある程度高まり、目標がはっきりしてくるので、共に合宿ということもでてくるし、「区切り」に対しての迫込みという貴重な時間にもなるわけである。ところで、ここで取りあげたものと少々違った意味で興味深いものに秋川でのギター教室の合宿がある。ここで行なわれた合宿の特徴は時期にある。他の事例で示された発表の前でのものと違い、教室が開かれてまもない時期で行なわれていることである。目的は、参加者同士のコミュニケーションと連帯をはかること、教室の主旨をわかしてもらふことにあるわけだが、教室、事業などがはじまってまもない時期は、参加者のその教室にいだいてきたイメージが様々であり、見知らぬ人ばかりがはじめて顔を合わせることから、青年たち自身も不安があるだろうし、担当者としても参加者をとらえることが最も難しい時期でもある。そういう時に合宿をもつことで青年たちの交流をはかり、これからの教室の進行を円滑にするというねらいは、価値があるのではないだろうか。

このような経過をたどって、それぞれの発表の場へと進み、その後、自主サークルとして活動していったところもあったようである。

以上の経過から、これらの事例で共通してみられることは、講師との講義や、座談会、ディスコ、喫茶店での交流、話し合いを通し、事業の要点を理解し合ったこと。そして計画の中に参加者自らが日程、方法などを組み立てていける余裕があり、自由なコミュニケーションの場があった。3つに、発表の機会をもうけることにより、はっきりとした目標ができ、参加者たちの連帯感の高まりが著しくみられたことなどが、あげられそうである。

(S.E)

(4) 「表現と主張」・「大衆性と専門性」

この二つの問題をどう考え、どう評価していくかは、「青年教育における文化活動」をすすめていくうえで、大切な意義づけにもなってくると思われるので、慎重なアプローチが求められるが……？今回は、小金井市青少年センターでおこなわれた「落語愛好会」(以下「落語」)と国分寺市恋ヶ窪公民館の「ミュージカル教室」(以下「ミュージカル」)という二つの実践例にふれながら、この問題を考える材料を提供していきたい。

この二つは、「青年教育における文化活動とは」の部分に説明が出ていると思うが、「落語」は、

「個別でも可能な表現活動」であり、「ミュージカル」は、「チームワークを必要とする表現活動」であること、また前者は、師弟関係のはっきりした、いわゆる専門「芸」であり、題材が割に型にはまっているものであること、一方、後者は、「総意による創作活動」であるという、おたがいに対照的でくればよい文化活動ということから、この二つをえらんでみた。

① 表現と主張

青年が文化活動に参加してくる要求のひとつに、「楽しく遊びたい」という面がある。それは、「多くの青年は、マスコミや娯楽産業から多くの刺激を受けているが、青年の手でつかんだ実感としての文化や遊びがないということ」(72, 3月号『月刊社会教育』山崎氏レポート)、つまり、青年の中に、ワンパターンの「あそび」や「文化」がはやり、豊かな感性が育てられていかないことから、ある意味で、「本能的」に骨化した感性をほりおこすために、文化活動を求めてやってくるのではないだろうか。だとすれば、その文化活動に参加して来た青年が、どのような表現力を身につけ、自己変革し、主張をもつかということ、その文化活動の成否にかかわるといっても、過言ではない。

さて、「落語」と「ミュージカル」では、この「表現と主張」がどのように捉えられ、参加青年の中でどう変わっていったのであろうか。レポートから拾ってみるとつぎのようになる。(表1)

表現と主張(表1)

「落語」

「ミュージカル」

(1)	ねらい 位置づけ	自己表現の手段としての文化活動という位置づけでとりくんだ。	創作・表現活動の必要性を感じて、とりくみは始める。
(2)	目 方 向	方向としては、「話芸を通して、自己を表現する楽しさ、落語の中の人間讃歌の情感にふれることで、生きるよろこびを日常生活の中に見い出す」「口べたでも、何でもいから小咄の一つも人前でやろう」	目標としては、仲間づくりと創作活動とし、その中で生き方を考えることをねらいとした。
(3)	参加者がどう変 わっていったか	・自分で演じるにより他の演者への関心が高まる。 ・自分たちも実際に演じることで、話芸を学び、落語の味わいを内側からつかむ。	「最後には既製の劇を上演するのだらうと思っていました」 ↓ 「自分たち自身が、何かを創り上げ行動することを皆が求め導いていることに気づきました。私も心の転換をはかったのです」
(4)	個人芸と 集団芸	人を前にして一人で表現することのきびしさは、個々の人間性への自己認識を強烈に深めた。	(あっちこっちにゆれ、討論をぶつけあわせたことが)実は、もっと深いところで葛藤しているお互いの本当の心が見えてきて、だんだん足並みが揃うようになった。
(5)	表現と主張をど う実現できたか	古典落語をやる場合、実生活の題材をもとに、情感を主張し、表現することにはならない。	ミュージカルの創作という集団創作活動を通して各人の持ち味を十分に引き出し、その総和のうえにプラスアルファを加えて公演という形で幕をおろすことができた。

まず、念頭に入れておかねばならないのは、「落語」は、多少のフリックはできるにしても、通常

は「既製品」を題材にえらぶことである。

一方、「ミュージカル」は、徹底して「創作」ということを求めたということ、そのちがいは「表現と主張をどう実現できたか」⑤に、あらわれている（表1参照）。しかし、考えるところ「落語」においても、実生活そのものの表現・主張はむずかしいかもしれないが、「大衆芸能」を通じて聴衆と多くの共感をともにすることができていくのではないかと思う。そうした意味で両者は、人間としての感性をRecreateしながら参加青年の自己変革に迫っていったといえる。

また、「ミュージカル」のレポートの中で「表現と主張」についてこう言っている。「創作することを一番大きな流れとして、位置づけたこと、それによって『表現』する内容である『君はどう生きるのか』と問いかけている」そういう創作活動にしていっていったということである。つまり、青年教育での文化活動は、青年の生活（よろこび、苦悩、欲求など）の実感を単なる再現としてではなく、「よろこび」「苦悩」「欲求」を主張に鍛え、それを表現力で、表現（文化・芸術活動）へとたかめていく、そうしたことを通して、現実に対する認識を深めていく、このことが求められているのだと思う。

② 大衆性と専門性

はじめに、文化活動における大衆性、専門性には二つの面があると思う。その一つは、文化活動内部での大衆性・専門性であり、もう一つは、その文化活動を取りまく外部（観衆・地域など）に対する大衆性・専門性であろう。

これも、やはり、「落語」と「ミュージカル」をくらべてみると次表のようになる。

大衆性と専門性（表Ⅱ）

内面の専門性・大衆性		外面の専門性・大衆性	
運 営	落語	演じる派、演じたくない派の両方の要求を満たす（月1回の鑑賞会と週一回の斬しのけいこの二本立）	落語
	ミュージカル	・仲間づくりに力点をおいて ・創作するという事で参加者の総意にもとづくほかなく	・地域にはたらきかけていけるもの ・幅広い年齢層に受け入れられ青年がリーダーシップがとれるもの ・大衆芸能（地域の実情と要求にあったもの） ・地域寄席の主體的な負い手としての方向性をもったもの ・学大・法大の協力
技 量	落語	分相応の芸を説く（プロになりたいというものが出てくる）	ミュージカル
	ミュージカル	もっと身近なもので自分にもできそうな気がしてきた（白紙のうえでもち味を生かす）	

ここで、相互の、つまり内面（運営・技量）・外面の大衆性・専門性はそれぞれ密接な関連をもっているのだと思うが、主として「技量」の問題を中心に考えてみることにする。

「公募」というかたちで青年教育を展開する場合、前提としなければならないのは、どの青年でもできるという事が大事になる。さらには、その中に「あそび」としての文化活動のたのしさがなくてはならない。

しかし、「落語」にしても「ミュージカル」にしても、たいへん相互研磨をかさねて、一つの結実をみたわけで、そこにはいいかげんさはみられない。もちろん、芸で身をたてるプロとちがいがあから、「技量」の上達に対するきびしきは、くらべようもないと思う。「落語」の場合は、古典芸能だから、どうしても、それなりの師弟関係がもちこまれるが、プロのように「閉じられた」専門性ではなく、それは「開かれた」専門性といえよう。この自由さの中からの発展という「開かれた」専門性が、ちがった意味での上達につながっていくことも期待できる。

最後に、「ミュージカル」のレポートはこう言っている。『「教室」』としての内容は、無論プロフェッショナルな内容には結びつかない。演劇の場合、どれだけ演技力にみがきかけられることができるか、一つのメルクマールにされることが良くあるが、『教室』であるかぎりには「何を主張し、どれだけの交流を持ち得るか」そしてその中で、『どれだけ自己の表現力を鍛えることができるか』に焦点を絞って進めるべきではないだろうか。

(H.M)

(5) ふれあいの成果、活動の成果としての発展

各事業報告をもとに、大まかに言えば、その事業の成果についてさぐり、文化活動を通じて青年の中に表われる変化についてその特徴を書いてみたい。

レポートする際の視点として、その事業の特徴的或る個人の変化、変革に着目すること、また、集団がそれをどう支え、集団もそのことでどう変化したのかという二点が定められていた。

① 事業を通じて個人にどう何を働きかけることができたのか

国分寺市窓ヶ窪公民館のミュージカル教室では、日常生活の中で何もできないという思いにかられている青年が、何かやりたいという要求を基礎に公民館にやってくるということが出されている。この場合には、他者との出会いという意味で仲間づくりということが、結果としてみると、事業全体の進行に大きな要素を占めている。この実践では、青年の手で台本から創作して、公演までの活動となるので、集団の中で一人一人の役割が確実に要求される。従って仲間とともに協力し合って、活動していかないかぎり、全体の進行は目に見えるものとは、ならないと思われる。一方ミュージカルというと、ブロードウェイのそれをイメージしてしまい、参加青年が自分達の生活を題材として、自分達のミュージカルを創作し、練習を積んでいくまでには、当初一つのステップがあったと思われる。参加者の中で、自分達のミュージカルをイメージできるようになっていく過程が仲間関係の創造と密接に関係していたのではないだろうか。小金井市の落語研究会では、演ずる志向を持つ参加者（青年の多く）と落語を聞き批評する志向を持つ参加者（年配者）との間の仲間としての関係の違いも、地域寄席実現にむけた練習をし合うことの中で克服し、幅広く仲間を迎えていく姿勢をつくることにな

されたと報告された。この場合は、演ずる人と聞く人の共通の取り組み課題として、自分達の手で地域寄席を実現していくことが大きい要素になっている。その中で、個々の役割が生まれ、一つの集団が形づくられていったようだ。また、落語という文化活動の持つ性質から、かなり幅広い世代にも受け入れられるということがあり、その性格を生かした参加者同士の触れ合いが、落語を演ずる場合の技術向上にも一つの役割をはたしたと思われる。人を前にして、一人で表現することの厳しさは、厳しさとして要求され、落語の持つ人間讃歌との触れ合いから「個々の人間性への自己認識を強烈に深められた」と報告されている。また、昭島市のフォークギター教室では、技術志向の参加者は、教室の進行とともに、不参加が目立ち、教室外での交流に積極的に参加してくるメンバーは最後まで参加している。またここでも、コンサートを設定し、公演実現にむけた具体的準備の過程が活動全体を盛り上げ、仲間関係の創造に重要な役割をはたしている。もちろん、秋川市のギター教室の場合にも見られるように、技術修得のための努力が各参加者個人に要求されるわけである。昭島のフォークギター教室でも、技術的に追いついていくためには「シンディ」努力が必要になるとされている。担当者の意図としての文化活動を通じて仲間づくりということは、ただそのことが個別に実現されるわけではなく、それぞれの活動を通じて、それぞれの活動の目ざすことの実現のための努力を共有し合うことが基礎となっている。それは、ミュージカル、演劇等の集団での取り組みを基本としているものにせよ、落語などの個人的活動にせよ、青年たちは、他人との出会いと活動を通じて、仲間の重要さを発見し、認識の広がりを獲得していく。また、文化活動の特徴として、活動を通じて感性を個人のレベルで錬磨することから、集団のレベルでの高め合いにまで実現される可能性が有り得ると言ってもよいだろう。国分寺のミュージカル教室では、仲間とともに、ミュージカルの台本を創作し、公演を実現していく過程で、「仲間って素晴らしい」という発見から、集団活動の基礎となる民主主義の発見ということにまで及び、そのことが報告の中で語られた。従って結論的に言えば、個々の活動の技術修得の努力と苦労を共有化していくなかで、仲間を発見し、関係を育て、参加者一人一人の感性をはぐくみ、青年の認識の広がりと成長が実現されると言えるのではないだろうか。もちろん、都立府中青年の家のダンスフェスティバルの実践に見られるように、この場合は、実行委活動を通じた仲間との出会いと同時に、ディスコダンスを踊ることの楽しさと、そのことを同時に体験する連帯感が活動を支える大きな魅力となっているが、その意味で、文化活動の事業が、青年に対して楽しさを提供し得るかどうか、その事業が成立するかどうかの前提になると思われる。

(2) 活動の成果としての発展

ここでは、その事業を行なった結果、地域の青年の活動や、地域の文化活動に集団として、どう影響を及ぼしたのか、という視点をもとに実践報告をまとめてみたい。

小金井市の落語研究会の実践は「小金井については、青年の文化活動が地域の中に、なかなか受け入れられていないと同時に、青年の側からも地域へ働きかける意識が低いと思われる。さらに、個々の青年をみても地域からまったく縁外され孤立している状況にある」という担当者の認識から事業を設定している。ここで報告されていることばは、固有名詞を他のものとも変更しても程度の差と歴史性の若干の違いを越えてなんら不都合の生じない、どこの地域にもあてはまるものではないだろうか。

とりわけ青年において、地域意識が希薄であるという問題は、都市型の青年事業全般にあてはまると思われる。従って個々のレポートの中でも、先にのべた視点からは、全般にまだまだ、弱いものしか引き出し得ないところが我々のかかえている段階と考えられる。しかし小金井市の場合には、落語という伝統的な大衆芸能を地域寄席として、それもプロの呼び屋におんぶする形ではなく、実現していくとする当初からの担当者のねらいがあったため、積極的に地域文化の主体を産み出していく結果となり得ているようだ。現在も、徐々に広がりを見せ、年4回の定例寄席を実現している。国分寺のミュージカル教室では、教室課程の終了後自主サークルのミュージカル劇団として、公演活動がなされ、公演ごとに、新しいメンバーの参加者があるという。しかし、活動の内容そのものに、地域との直接の結びつきを見出し得るとはかならずしも言えないというのが実情ではないかと報告がなされた。また、秋川市のギター教室の終了後生まれたサークルは、独自のコンサート活動やママさんコーラスとの提携などによる活動をしなが、従来地域青年会中心であった秋育連に刺激を与えていると報告されている。羽村町の演劇教室の実践からは、サークル劇団「ハムラ」が生まれ、商業文化に対抗して、青年達の手で地域で演劇活動を地域を見つめていくという方向が出されている。また、府中青年の家のダンスフェスティバルの実践からは、都段階で広域的規模でのサークル交流が個人的レベルでなされていると報告された。全般的には、当初設定した視点では、なかなか具体的実践を働かすまでにはいたらないが、個々の実践から、地域へどう発展させていくのか、具体的な青年事業の課題として発見されるということが、現在の実情ではないだろうか。

③ 個人は個人の生活をどうひろめ、どう変化させ、地域、職場家庭へ影響を及ぼしたのか

川島市のフォークギター教室の参加者の一人で、大手商社に勤める女性参加者が、それまで、会社と家との往復に終始していた生活から、教室に来る他の参加者との出会いにより結婚していった例が報告されている。彼女は教室に来るなかで、自分の生活と生き方を見直し、仕事もやめ母をめぐしているという。また、小金井市の落語研究会では、参加者の一人で、中学を卒業し鮎屋に就職して間もない16才の青年が、従来、人前で話すことがあまりできなかった性格を、落語を稽古していく中で変えていき、大きく声も出せるようになり、一時はプロの噺家になりたいとまで言い出し周囲を心配させたりしたが、仲間を支えられて、地域寄席で活躍しているという。前者の例から、直接、フォークギター教室の固有の活動からの生活の変化というよりも、そこで生まれた人間関係から影響を受け生活を変えていったとおさえることができる。後者の例は、落語を演ずるという活動の中で、仲間に激励されながら、自分を変えていった例と言えるのではないだろうか。国分寺市のミュージカル教室では、公演のための台本の材料を参加してきた青年の生活に求め、都会に出て来た青年のリターン問題を扱っていたのだが、その台本通りに帰郷することになった女性参加者の例が出されている。これなどは、物語のリアリティーを参加してきた青年の生活の中に求めた、そのことによる影響ではないかと報告された。また他の地域へ就職で移っていた青年が、その地の公民館で、演劇サークルをつくって活躍しているという事例も出された。

ここでは、それぞれの事業に参加した青年一人一人に焦点をあて、或る特徴的個人の変化というものを実践報告の中に求めていたわけであるが、全般的には、個人を深く見つめた形でのレポートはあ

まりなされていないといえる。このことは、青年事業に取り組む姿勢として職員が、一人一人の参加者をみつめて事業を展開したり記録づくりに取り組むというよりも、その事業全体の動きにとらわれすぎてしまい、細かく一人一人をみつめるということが不足してしまうという面を示しているのではないと思われる。確かに、どの事業にしても、終極的には、参加青年一人一人の成長、変化というものが期待されるわけであるから、職員には、事業を展開していく視点として、一人一人の参加者をみつめるということが要求されるわけであるが、このことは非常に困難の多いことではないかと思われる。宿舎の討論では、この問題に触れて、学校教育との対比で、個人に焦点を合わせての教室日誌のようなものの必要性が語られたりしたが、この点は今後の我々の課題になるのではないだろうか。

(M. M)